

## 序

本書は、京都大學文學部が、明治三十九年京都帝國大學文科大學の名のもとに創立されて以來、あたかも滿五十年に達したのを記念する事業の一つとして、同時に刊行する記念論文集とともに、編集刊行するものである。

五十年という年月は、國外の大學のあるものもつそれに比すれば、必ずしも長くはない。しかしまた必ずしも短い年月ではない。現在の文學部の構成員は、五十年前、本學部の創立當時、なお幼童であるか、或はまだ生を享けていなかったのであり、學生はなおさらのことである。學部が創立以來、幾多の努力を経て、より長い歴史をもつ國內國外の大學に對し遜色を見ぬ今日の状態にまで成長發展した過程の全貌は、記録された歴史によつて知るほかはないのである。そうして今日の状態をきざしく努力された先輩たちに對する感謝を新たにせねばならぬ。またわれわれは、先輩たちから繼承すべきものを繼承し、是正すべきものを是止しつつ、進んでいると信ずるが、過去の歴史をふりかえることは、この自信を強めるために必要である。歴史は必ずしもわれわれを拘束しないであろう。しかし、是正すべきものを是正しないのは、怠惰であるとともに、繼承すべきものを繼承しないのは、精力の浪費である。眞理を求める學問の業においては、ことに然りである。これすなわち本書の編集が、學部の意思として決定し、實行された所以である。

本學部がその歴史を刊行するのは、本書が最初ではない。昭和十年には、京都帝國大學文學部三十周年史が刊行されている。本書はそれと重複をさけ、近二十年の時代の敘述を詳しくした。編集のためには、前文學部長高田三郎教授の時代に、白井二尙教授を委員長とし、梅原末治、小葉田淳、遠藤嘉基、赤松俊秀の諸教授を委員とする五十年史編纂委員會が組織され、各研究室の提出した資料をもととし、また學部に保存する公文書の手すべてを點檢し

つつ、佐藤長助教、教養部岸俊男助教が、實際の執筆にあつた。また先輩教官と卒業生に回想録を求め、多數の寄稿を得た。題簽は鈴木虎雄名譽教授の筆である。いづれもあつく謝意を表さねばならぬ。校正を助けた萩原淳平、米田賢次郎、間野潜龍、寫眞整備を擔當した高橋猪之介諸氏の勞苦も、連絡その他の雜務にあつた八幡禮江嬢の勞とともに忘れ得ぬところである。

更にまた本書刊行の費用は、本學部關係者および卒業生の團體である以文會、および同會に經濟的援助を與へられた多くの諸氏の力によつた。學部として深く感謝するところである。

昭和三十一年十一月

京都大學文學部長

吉川幸次郎

## 凡 例

一、本書は昭和三十一年八月三十一日に至るまでの本學部の歴史について編述したもので、本文と附録の二部から成つている。

一、本文中では著書は『』、論文・講義題目は「」によつて一應區別し、原則としてその下に發刊および實施年度を記入した。なお學會も「」によつて示した場合が多い。

一、掲載した舊教授の肖像寫眞は、それぞれ關係のもつとも深かつた「講座の沿革」に收めたが、學部長に就任した教授のものは、「學部の歴史」に掲げることとした。

一、諸規程は舊制では創設當初の明治三十九年制定のもの、戦前最後の昭和十六年の改正、戦時中の臨時措置、戦後の昭和二十一年の改正、新制では昭和二十四年制定のものと同現行昭和三十年改正のもの全文を掲げることとし、他の改正はすべてその要點を摘記するにとどめ、これに大學院文學研究科規程と陳列館内規とを加えた。

一、現・舊職員の經歷は本學部關係のものだけに限つて記し、學位は在任當時既得のものを掲出した。

一、回想録は名譽教授・元教授・卒業生および元事務官の順に收めた。なお三浦講師の詩は印刷の都合上最後に掲げた。またそれらのかなづかいは一、二のものを除き、編集の際に新かなづかに改めることとした。

一、創設關係史料はもと谷本富博士の手許にあり、西田直二郎名譽教授によつて本委員會に提出されたが、そのうちから適當なものを二、三採録した。

一、年譜の教官移動は専任講師以上を記し、□印は全學的事項、○印は文學部關係事項として區別した。

一、本書の背および扉の題字は鈴木虎雄名譽教授の筆になる。